

2023 AC

The 2nd Celebrate Hanukkah

原語で味わう創世記第2章

12/24~31

No.12 31日(夜)

「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】ヨハネの福音書5章39～40節

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。

その聖書は、わたしについて証ししているものです。

40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

●イエシュアは私たちに聖書を正しく解釈することを教えています。それは、イエシュアという鍵を入れ込むことで、初めて言わんとすることが見えて来るということです。

「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】イザヤ書34章16節
主の書物を調べて読め。
これらのもののうち、どれも失われていない。
それぞれ自分の伴侶を欠くものはない。
それは、主の口がこれを命じ、
主の御霊がこれらを集めたからである。

※「自分の伴侶」(=雌も雄も)にたとえられているのは、神のことばの証言が必ず伴侶のように置かれているからです。「調べて」は「尋ね求める」の「ダーラシュ」(דָּרָשׁ)、
「読む」は「出会う、見つける、向かい合う」の「カーラー」(קָרָא)です。
そうするなら、必ず「ふさわしい助け手」(自分の伴侶)に出会うのです。主の口(男性形)とそれを集める御霊(女性形)は一對だからです。

「創世記2章」を学ぶ上で大切な視点

【新改訳2017】

イザヤ書 46章10節

わたしは後のことを初めから告げ、
まだなされていないことを昔から告げ、

『わたしの計画は成就し、
わたしの望むことをすべて成し遂げる』という。

①ここには強調するために、パラレリズム修辞法が使われています。

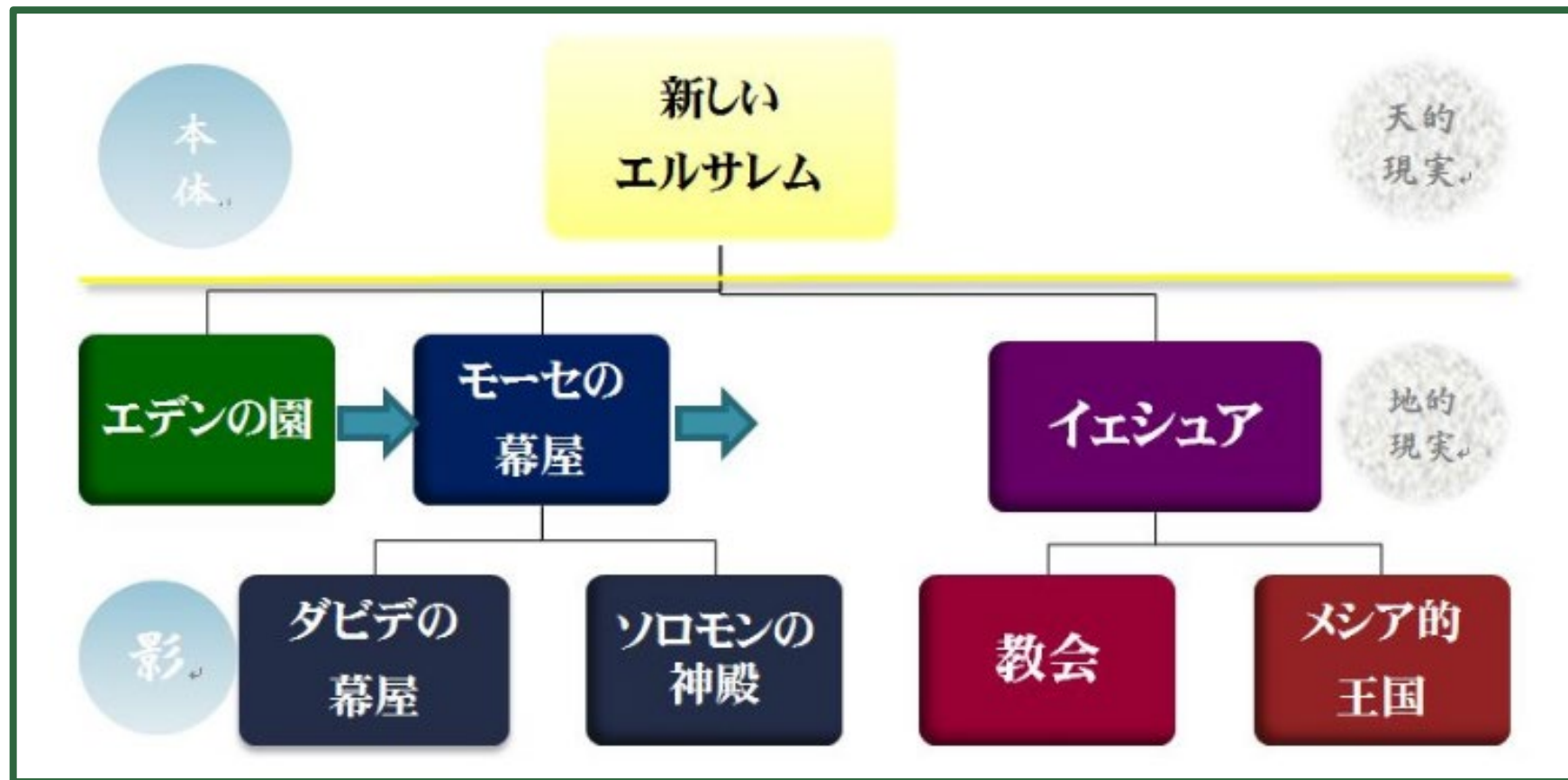
②初めのなかに後のこと、まだなされていない将来のことが
折り重なるようにして(重層的に)告げられているということです。

「・・・こと」とは「神のご計画」のことです。

これを知るためには、たましいではなく、霊の中で悟る必要があるのです。

「エデンの園」の本体は「新しいエルサレム」

- それは「天」にあり、しかもすでに完成されているのです。



1. 前回の補填 ①

●前回は、「男は妻と結ばれて一体となる」ために「父と母を離れる(捨てる、見捨てる)」ことが不可欠であることを学びました。その「父と母」とは、字義通りではなく預言的なメタファーです。預言的というのは、イエシュアが登場してはじめてその意味が明らかにされるということです。

●24節の「父」とはユダヤ教の**神殿**(ヘーハール:הֵיכָל/男性名詞)のことです。また「母」とは**律法主義**(トーラー:תּוֹרָה、あるいはイムラー:אִמָּרָה/女性名詞)のことです。つまり「父と母」とは、イエシュアの時代に席卷していた**神殿ユダヤ教**、および**律法主義**(罪と死の律法)なのです。この二つのくびきが「父と母」に隠されているのです(ヨハネ8:44参照)。

1. 前回の補填 ②

●さらに注目したいことは、男も女も「父と母を離れ」とは示されていません。あくまでも「男」(イーシュ:ψῆς)に対して語られています。この点は重要です。男も女も二人は一体となるわけですから、男が「父と母を離れ」るならば当然、女もそうなります。まず男なのです。

●この24節のことばの中に、パウロは「キリストと教会が一体となる」という偉大な奥義が啓示されていることを述べています(エペ5:32)。女は男のふさわしい助け手として、男の「あばら骨」から造り上げられたという事実のゆえに、神のいのちを受け継ぐ尊い存在です。と同時に「弱い器」でもあるのです(1ペテ3:7)。女・妻(=エックレーシア)は「弱い器」であるゆえに、いのちの源泉である男のくびきを負う必要があるのです。

1. 前回の補填 ③

●イエシュアは「父と母を離れ」て、当時の宗教の外で神に仕えました。

- (1) イエシュアはナザレにおいてマリアの胎に宿りました。
- (2) 宗教の中心地エルサレムから最も遠いナザレの町に住み「ナザレ人」と呼ばれました。
ナタナエルは「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言いました(ヨハネ1:46)。
- (3) イエシュアはエルサレムにある指導者たちの影響を受けていません。彼らの宗教的伝統、伝承、律法の権威者からの教育もを受けていません。しかも彼らが解釈する安息日や断食の規定もことごとく破りました。イエシュアは花婿としてだけでなく、「真新しい布切れ、新しい衣、新しいぶどう酒、新しい皮袋」としてご自身を示されました。
- (4) イエシュアは文字(もんじ)ではなく、「霊であり、いのち」を与えることばを語りました。
- (5) イエシュアによって召された弟子たちは、みな「無学の普通の人」でした。
- (6) エルサレムでイエシュアは宗教指導者たち(ストイケイア)によって殺されました。
- (7) ユダヤ教の申し子サウロを「光」によって造り変えて、神のことばを完成させました。

1. 前回の補填 ④

●福音書でイエシュアは少なくとも四度、安息日の規定を破っています。故意にです(マタイ12:1, 9~13, ヨハネ5:10, 9:14)。

●ユダヤ教の最も重要な規定(=柱)は三つあります。

- (1) 安息日を守ること
- (2) 割礼を施すこと
- (3) 食物規定を守ること

●イエシュアは彼らの規定を廃棄しました。パウロは「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは新しい創造です」と言っています(ガラ6:15)。イエシュアは、ユダヤ教の宗教的な規定によってではなく(たましいではなく)、「あばら骨」つまり「霊によって生きる」ことを教え、求めておられるのです。

2. 25節のテキスト ①

【新改訳2017】創世記2章25節

そのとき、人とその妻はふたりとも裸であったが、
恥ずかしいとは思わなかった。

イトウボーシャーシュー	ヴェロー	ヴェイシュトー	ハーアーダーム	アルーミーム	シエネーヘン	ヴァイユー
וְלֹא־חָשְׁבוּ־אִתְּכֶ֑ם	וְאִשְׁתּוֹ־	הָאָדָם־	עֲרוּמִים־	שְׁנֵיהֶ֑ם	וַיְהִי־	
彼らは互いに	その妻は	その人	裸 (複数)	彼ら二人とも	～であった	
(וְלֹא־のヒットパエル態)						

2. 25節のテキスト ②

●25節で初めて登場する語彙は、以下の2つです。

- (1) 「裸」は「アーローム」(רֹאִם)形容詞。動詞は「アーラム」(רָאָם)。
字義どおりでもあり、たとえともなっています。信頼と恥辱の両義性。
- (2) 「恥ずかしいと思う」は「ボーシュ」(בוֹשׁוּ)ですが、ここでは、
「彼らは互いに恥ずかしいと思う」という動詞のヒットパエル態が、
「ロー」(לֹא)で強く否定されています(強い信頼の絆で結ばれている)。

23節・・・「男」(אִישׁ)と「女」(אִשָּׁה)が、

24節・・・「男」(אִישׁ)と「彼の女(妻)」(אִשָּׁתוֹ)となり、

25節・・・「人」(אָדָם)と「彼の女(妻)」(אִשָּׁתוֹ)となっています。

3. 「裸」の意味 ①

(1) そのとき、人とその妻はふたりとも裸であった

● 「そのとき」と訳されていますが、原文では接続詞の「ヴァ」(1)となっています。これは24節の「ふたりは一体となる」ことを引き継いでいる接続詞です。そのような状態にあるとき、ふたりは強い信頼関係にあることを連想させます。ふたりが「顔と顔を合わせている状態」「互いに分かり合っている状態」であると理解します。やがて新しいエルサレムにおいては「御顔を仰ぎ見る」関係になりますが、それは覆いのない「裸」の状態です。キリストとエックレーシアにおいて、「初代教会」がそのような関係に最も近い状態でした。聖書においては、最初の姿が最も美しいのです。ですから、いつもそこに立ち返らなければならないのです。

3. 「裸」の意味 ②

(2) 裸をいちじくの葉で覆う出来事

●彼らは「裸であった」のですが、それすら気がついていません。そのことを、3章7節で初めて意識するのです。

【新改訳2017】創世記3章7節

こうして、ふたりの目は開かれ、自分たちが裸であることを知った。そこで彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちのために腰の覆いを作った。

●「覆い」は「帯・腰巻」を意味する「ハゴラー」(הַגָּוֶל)で、「自分たちのために隠す」行為、それは神に逆らう(敵対する)ときに使われるようになります。ふたりは自分たちのために腰の覆いを作りますが、「神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています」(ヘブル4:13)。こうして自分のために武装することが始まりました。武装する必要のないはじめの状態が「裸」なのです。

4. 「恥ずかしいと思わない」の意味 ①

●初代教会を見るなら、そこには神殿や伝承・伝統といった覆いとなるものが全くありませんでした。イエシュアのみ、シエーム・イエシュアだけです。毎日、主にある交わりがなされていましたが、何かの規定があってそうしたわけではありません。ただ、霊に従ってなされていたのです。そこには、既定の権威や制度もありません。ただ**神のいのちがそこに流れていた**のです。実はこのことが重要なのです。**神のいのちがある**ことで、彼らは「恥じることはなかった」のです。

●使徒ペテロとヨハネが一人の男を癒やしたことで、ユダヤ当局に捕らえられ、「おまえたちは何の権威によって、また、だれの名によってあのようなことをしたのか」と尋問されました。このことを通して、ペテロは**イエシュアの御名(シエーム・イエシュア)の権威による**ことを証ししました(使徒4:7~12)。

4. 「恥ずかしいと思わない」の意味 ②

●彼らはユダヤ当局から脅されたにもかかわらず、仲間のところに帰って残らず報告しました。するとこれを聞いた人々は、心を一つにして神に向かって声を上げました。

①【新改訳2017】使徒の働き4章29～31節

29 主よ。今、彼らの脅かしをご覧になって、しもべたちにあなたのみことばを大胆に語らせてください。30 また、御手を伸ばし、あなたの聖なるしもベイエスの名によって、癒やしとしるしと不思議を行わせてください。」

31 彼らが祈り終わると、集まっていた場所が揺れ動き、一同は聖霊に満たされ（ピンプレーミ）、神のことばを大胆に語り出した。

②【新改訳2017】使徒の働き5章17～20節

17 そこで、大祭司とその仲間たち、すなわちサドカイ派の者たちはみな、ねたみに燃えて立ち上がり、18 使徒たちに手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた。19 ところが、夜、主の使いが牢の戸を開け、彼らを連れ出し、20 「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」と言った。

4. 「恥ずかしいと思わない」の意味 ③

●使徒たちにあるものは、「イエシュアの御名」(シエーム・イエシュア)だけです。神殿ユダヤ教の人たち(サドカイ派の人たち)は多くの立派な覆いを持っていました。しかしそれらは、いのちをもたらすことのできない権威と力でした。一方の使徒たちは、彼らのような覆いがなくても、「いのちのことば」を持っていました。

●「いのち」は「ゾーエー」(ζωή)、「ことば」はその都度与えられる神のことば「レーマ」(ῥήμα)です。それがあつて、彼らは決して**恥じることがない**(恥ずかしいとは思わない)のです。

●人とその妻は「キリストとエックレーシア」です。つまり「花婿と花嫁」です。花嫁は花婿の臨在のいのちだけで十分なのです。あとは何も要りません。花嫁にとって「生きることはキリスト」「キリストは花嫁のすべて」とならなければなりません。これが初代教会の姿です。

5. 「恥を見る」「恥を見ない」

● 詩篇の中に「恥を見る」と「恥を見ないように」というフレーズをしばしば目にします。

【新改訳2017】詩篇25篇2～3, 20節

2 わが神 あなたに 私は信頼いたします。どうか私が恥を見ないように敵が私に勝ち誇らないようにしてください。

3 まことに あなたを待ち望む者がだれも恥を見ずゆえなく裏切る者が 恥を見ますように。

20 私のたましいを守り 私を救い出してください。

私が恥を見ないようにしてください。私はあなたに身を避けます。

● 「恥を見る」「恥を見ない」の決定的な違いは、その人がいのちの源泉につながっているか、つながっていないかの違いなのです。

今回のまとめ

- 2章最後の25節は、その前の節と密接な関係を持っています。24節「男は・・妻と結ばれ、ふたりは一体となる」ということばの中に、「キリストと教会が一体となる」という偉大な奥義が隠されていることをパウロは示されました。その生きた絵が使徒の働き1～5章に表されています。キリスト教の歴史を概観するなら、教会にさまざまな制度が整えられるにつれて、いのちの喪失という危険が伴っていることを知らされます。
- 覆いの中にいることはある種の安心感を与えてくれますが、それが落とし穴となるのです。神を信頼する者にとって「裸」(アーローム: אֲרוֹמָה)であることはすばらしいことです。ところが3章に登場する「蛇」は、ふたりにその裸を「恥ずかしい」とたましいで思わせ、それを恐れさせたのです。人は霊によってではなく、たましいによって生きるようにさせられたのです。